

街角やきものセクション「茶碗」

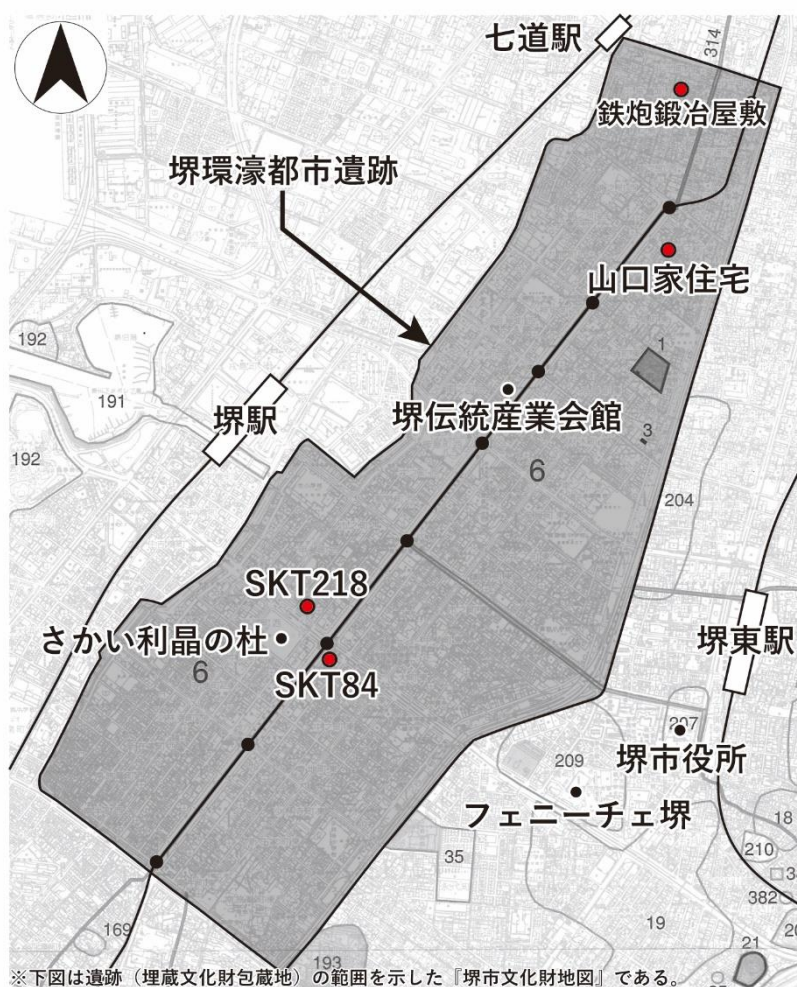
学芸員のちょこっと解説

中世の堺

中世の堺は「日本最大市のひとつなる自由都市」と評された国内有数の大都市でした。堺の商人は、国内のみならず、中国や朝鮮半島、東南アジアなど海外諸国との貿易を担っていました。貿易などの商いにより莫大な利益を生んだとも言われており、商人の活動は町の発展の原動力となっていたと考えられます。そして、その様子はポルトガル人の宣教師たちの報告により、本国やヨーロッパまで伝えられました。

ところが、^{けいちょう}慶長 20 年（1615）大坂夏の陣の前哨戦で豊臣家家臣の大野治胤^{はるたね}により放火されました。このことにより繁栄の頂点にあった堺のまちは、ほぼ全域が焼失しました。

^{さかいかんこうとしいせき}堺環濠都市遺跡では、昭和 50 年（1975）以降、これまでに 1400 以上の地点で調査が実施されてきました。調査では日々使用された日用品の他に、当時の豊かさを物語る多彩な茶道具が出土しています。それら出土品は、朱印船貿易等による富の蓄積で栄えた人々の生活を知ることのできる重要な資料であり、さらに当時の堺の町に茶の湯文化が深く浸透していたことを示します。



堺環濠都市遺跡の位置

茶碗とは

茶碗は、数ある茶道具の中でも中心的な存在です。というのも、単に茶を^{たしな}嗜むための器に留まらず、見て楽しみ、触れて楽しむ器であるからです。さらに茶会に出される茶碗は、亭主が季節や場面、客によって選んだもので、すなわち亭主の趣味や心意気、遊び心が表れているのです。

堺環濠都市遺跡における慶長 20 年（1615）大坂夏の陣の被災時の状況をみると、伝統的に用いられてきた^{てんもくぢゃわん}天目茶碗のほか、中国の^{せいじわん}青磁碗や朝鮮半島の^{こうらいぢゃわん}高麗茶碗のほか、^{なんしつせゆうとうき}軟質施釉陶器（いわゆる^{らくぢゃわん}楽茶碗）、瀬戸黒などの「^{せとぐろ}黒茶碗」、志野・黒織部・唐津などの「^{くつぢゃわん}沓茶碗」などがあります。中世の堺においても、現代と同じように、亭主が様々な趣向を凝らして、多様な産地の茶碗から逸品を選んだことでしょう。



堺環濠都市遺跡から出土した茶碗

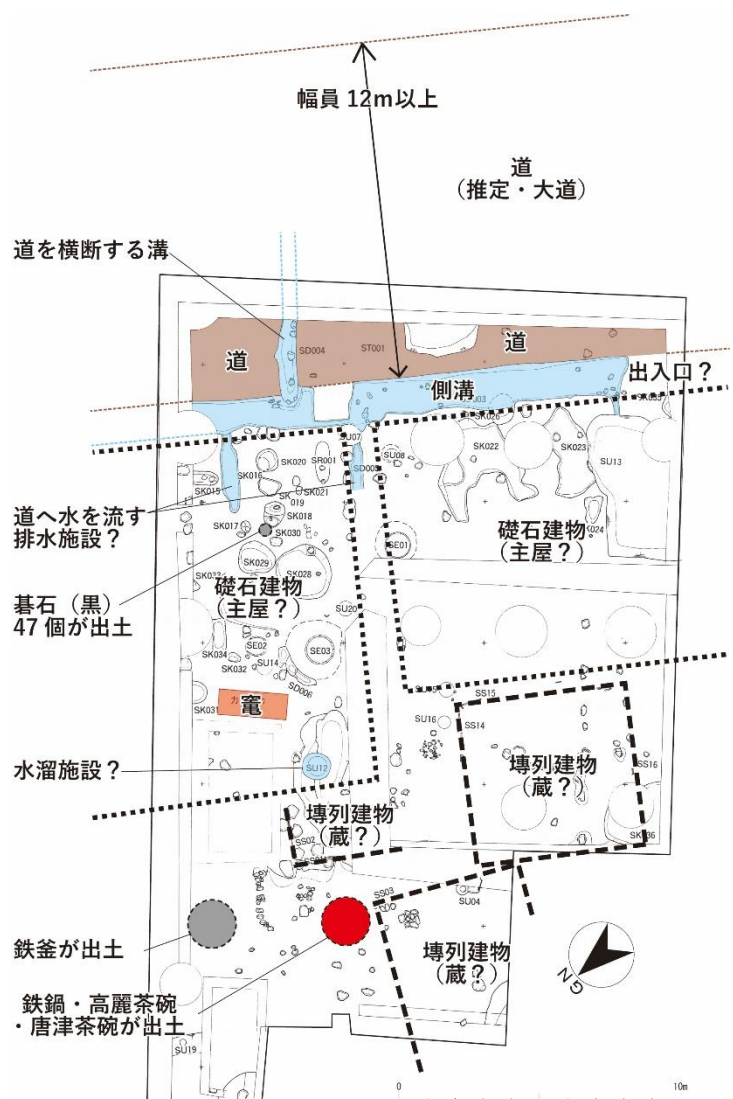
からつ
唐津 茶碗 (16世紀末から17世紀初頭、堺市文化財課所蔵)

SKT84 (堺区宿院町東1丁) は、昭和60年(1985)1～3月にかけて、大道筋とフェニックス通の交差点の南東角で実施された発掘調査です。調査では、室町時代の堺でも随一の幅員をもつ道の一端が検出され、調査地が今も昔もメインストリートに面していたことが分かりました。さらに、その道に面する礎石建物2棟と、その裏手(西方)で塙列建物3棟が検出され、当時の町屋の風景を復元するのに好例となる調査成果が得られました。

本品は、上記の発掘調査において、蔵の可能性ある塙列建物の付近から、高麗茶碗とともに出土しました。外面にはひがきもん ちどりもん 桧垣文や千鳥文などが描かれており、どこから見ても唐津らしい模様と武骨な肌感を感じることのできる逸品となっています。また本品は、口径約14cm、器高約10cmを測り、成人男性でも扱いにくい程の大振りなサイズ感です。商人が茶会に大人数の武人を招き、本品を回して飲んだのでしょうか…。



SKT84 大坂夏の陣被災時の遺構面 検出状況



SKT84 空間復元図



唐津茶碗 (SKT84 出土)



高麗茶碗 (SKT84 出土)

志野茶碗（16 世紀末から 17 世紀初頭、堺市文化財課所蔵）

本品は、昭和 62 年（1987）7 月から 9 月にかけて実施された SKT218 地点調査（堺区大町西 2 丁）において、慶長 20 年（1615）大坂夏の陣の被災面あるいは焼土層から出土しました。

本品は、SKT84 出土の唐津茶碗と同様、腰が低く、腰から口にかけて真っ直ぐ立ち上がるフォルムをしており、横から見ると、やや上にすぼまる長方形を呈しています。そのような形を呈する背景には、大人数での茶会に対応すべく大振りの茶碗を必要としたか、あるいは先行して出現していた瀬戸黒の影響を受けたなど、様々な想像ができます。

さらに、外面には縦方向の直線三本、横方向にはやや上に膨らむ弧線二本を描いています。これは橋を書いたと考えられます。桃山茶陶において橋は「住吉手」と呼ばれ、住吉大社の太鼓橋を見立てたと言われています。また本品をひっくり返すと、白濁色の長石釉が片方に流れ、黒色の肌が小さな窓からみえるなど、随所に多様な意匠が施されている逸品となっています。



橋を描いたのか？
志野茶碗（SKT218）



さりげない土みせ
と二重高台